

クラス	Q302	担当教員	大饗 広之
テーマ	現代青年の心理 & 心理療法的アプローチ		
著書・論文 研究課題等	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 「豹変する心」の現象学—精神科臨床の現場から— (勁草書房、2009) ◆ 「解離の病理—自己・世界・時代 (共著)」 (岩崎学術出版、2012) ◆ 「なぜ自殺は減らないのか—精神病理学からのアプローチ」 (勁草書房、2013) 		
ゼミナール概要			
キーワード：青年期、アイデンティティー、解離、トラウマ、心理療法的アプローチ			
<p>目的、内容、方法：</p> <p>いま青年期の心は今どうなっているのか、そして心理療法はそこにどうやってアプローチするのかといったことがこのゼミのテーマです。ただし「自分の心」に向かう態度がなければ心理療法もできないですし、他人の心について知ることでもできません（心理療法は人の心を通じて自分の心に向かうという相互実践です）。ゼミではお互いのテーマを持ち寄りながら、ディスカッションを繰り返して心のメタレベルを扱うことを学んでいきます。テーマは自由に漂流していき、そのなかでそれぞれが研究テーマを絞り込んでいきますが、2年間というのは一つの研究テーマに取りくむにはあまりにも短い期間です。めざすべきことは、各々が取り組むべきテーマの入り口に立つという程度でしょうが、本当に取り組むべきテーマを手にしたなら、大事なことは一生かけてそいつを煮詰めていくことです。それは気のきいた統計処理などよりも、不完全でもどれほど自分のテーマに興味をもって取り組むかにかかっています。</p> <p>ゼミの運営方法はみなさんのやる気にかかっていますが、模擬カウンセリングなども含めて、ディスカッション中心となりますから、少なくとも発表や相談、あるいは自己開示にみずから取り組んでいこうとしない人、他人を巻き込もうとする人、休みがちになりそうな人、さらには教職とかけもちの方などはご遠慮いただく方がいいと思います。とくに心理療法家を志す人であれば、①過去のトラウマにもかかわっていくこと、②心を扱う上での倫理（秘密保持）をわきまえていること、③集団状況で少しは自己開示を試みるのが最低条件です。ゼミという閉鎖的（中間的）な集団状況を、自分を知るための場として利用する気でのぞんで欲しいところです（そういう機会は今後もそうないでしょう）。心理療法は「三つ子の魂百まで」という固定観念をうちやぶって、なんらかの自己変革をめざす営みですが、そのためにも多少の心理的抵抗も覚悟しなければならないということです。</p>			
担当教員からのメッセージ			
<p>内面について考える（内省する）姿勢のない人にはこのゼミはおもしろくないこと請け合いです。心理学科には入ったけれど、こころについてはサッパリわからなかった、自分はぜんぜん変わらなかったという学生がけっこう多いようですが、まあそれでは時間と金をドブに捨てるようなもの。自分のこころを知るには「鏡としての他者」が必要であり、そのためにゼミをとことん利用すればいいし、多少の抵抗もがまんしなければならないというわけです。上にも書いたとおり、このゼミは討論中心で、学生の自主性に委ねられるところが大きいので、少なくともいろんなことに疑問を抱き、積極的に議論に参加していく姿勢がのぞまれます。自分の抱いた疑問に執念深くコミットしていけばけっこうおもしろくなるものです。単位取得については、とくに3年時には出席を厳密に評価します。ま、温情は期待できないと思ってください。</p>			